

Daniel, *Delia*——

Petrarchan tradition の観点から

加藤 芳子

I

Samuel Daniel¹は、1562年にSomersetに生れ、19才にしてOxfordに出てMagdalen Collegeに入学するが、単位を取らずして退学し、イタリアへ旅行したりする。やがて彼は、Wiltonに於けるかのPembroke家のfavourを受けるようになるのであるが、そこで彼はSir Philip Sidney及びその著*Arcadia*を知り、Sidneyの友人であるFulke Grevilleに出会う。更に、Sidneyの妹であるMary, the Countess of Pembrokeに出会う訳であるが、Daniel自身がその著*Defence of Ryme* (1603)の中で記しているように、このMaryこそが、Danielに対して詩作をするようにと勧めた最初のしかも重要な人物だったのである。²そして彼は、Maryの息子であるWilliam Herbertのfavourも受けるようになるが、この人物がShakespeareの*The Sonnets*の冒頭の部分のheroである事は言うまでもないだろう。このような人物達との触れ合いを通してDanielは、*Delia*とか*Cleopatra*, *Musophilus*, あるいは*The Complaint of Rosamond*, そして*Mirror for Magistrates*を、更には、Thomas Campionの*Observations in the Art of English Poesie* (1602)に対する*Defence of Ryme* (1603)などを出版するのであるが、本稿で取上げる*Delia*なる*sonnet sequence*に関しては、Petrarchan traditionに従っている事は、Arthur Colby Spragueも指摘している通りなのである。³

II

Danielの*sonnet sequence*である*Delia*は、Sidneyのそれである*Astrophel and Stella*が出版された年の翌年、即ち1592年に出版されている。その出版のいきさつについてDanielは、この詩集の冒頭に於ける、Countess of Pembrokeに捧げた

Dedication の中で、次のように弁明している。

To the Right Honourable the Ladie Marie,
Countesse of Pembroke.

Right honorable, although I rather desired to keep in the priuate passions of my youth, from the multitude, as things vtterd to my selfe, and consecrated to silence: yet seeing I was betraide by indiscretion of a greedie Printer, and had some of my secrets bewraide to the world, vncorrected: doubting the like of the rest, I am forced to publish that which I neuer ment.

(11. 1-10.)

即ち Daniel はそもそも、この sonnets を出版する意志などなかったのであるが、「秘密が間違っただけで暴露されてしまった」ので、やむなく出版に踏み切った訳なのである。

さて、この *Delia* を前後して、当時のエリザベス朝時代には、様々な sonnet sequence が出版されている。Spenser の *Amoretti*, Sidney の *Astrophel and Stella*, Drayton の *Idea Mirrour. Amours* 及び *Idea*, そして Shakespeare の *The Sonnets* 等がその主なものである。そして、その各々には、例えば、Spenser の場合は Elizabeth Boyle, Sidney は Lady Rich, Drayton は Anne Goodere, Shakesreare は Dark Lady, というように、それぞれ sonnet lady がいる訳で、当然、Daniel の場合の *Delia* なる sonnet lady は誰なのかという疑問が生じるのであるが、Sprague は、恐らく、Daniel の patroness であった Mary, the Countess of Pembroke であろうとしている。即ち、この *Delia* なる sequence は、現実の恋人に対して捧げられたものというよりは、そういう形を取りながらも、実際は、彼の patroness に対する敬愛をひそかに詠ったものと考えべきなのである。

さて、己れの sonnet lady の beauty や virtue を賛えて、彼女を saint や angel 等の神聖なものにたとえたり、彼女のつれなさによって引き起こされる己れの woes, sighes, tears, death などを悲痛な調子で描き、そのような状況にあってもなお、己れの愛を詠い上げるといふ、“unrequited love”, 即ち「報われぬ恋」の theme は、

Petrarch がその恋人 Laura に捧げたソネット集 *Canzoniere* (1470) の中心的な theme であり、これが、その後の sonnet sequence の archetype となった事は、衆知の事である。そして、このような Petrarchan tradition に従って書かれたソネットの特徴を、R. Tuve は、“whining poetry, feigned exaggeration, mere silken words”⁴ と述べて、その image (conceit) の展開の仕方が amplification によるものである点を、指摘している。

本稿で主に取上げるこの Petrarchan sonnets の種類をあらかじめ列挙しておくならば、3種類となる。第1の種類は、sonnet lady の disdain, cruelty を描き、それによって生じる詩人の恋の苦しさ、絶望、heart の death, woes, cares 等を描いている sonnets である。第2の種類は、sonnet lady の beauty, grace, virtue 等を賛美しながらも、それらがつかのまのはかないものである事を教えて、青春をむだに過ごさないようにと説得、あるいは嘆願しているものである。そして第3の種類は、己れの詩の不滅性と、その中で永遠に生き続ける sonnet lady を詠っているものである。

III

まず、第1の種類为例として、sonnet 29 を吟味してみよう。ここには、Petrarch の *Canzoniere* に於けるのと同様の mirror conceit が見られるのである。

Sonnet 29.

O why dooth *Delia* credite so her glasse,
Gazing her beautie deign'd her by the skyes:
And dooth not rather looke on him (alas)
Whose state best shewes the force of murthuring eyes.
The broken toppes of loftie trees declare,
The fury of a mercy-wanting storme:
And of what force your wounding graces are,
Vppon my selfe you best may finde the forme.
Then leaue your glasse, and gaze your selfe on mee,

That Mirroure shewes what powre is in your face:
To viewe your forme too much, may daunger bee,
Narcissus chaung'd t'a flowre in such a case.

And you are chaung'd, but not t'a Hiacint;

I feare your eye hath turn'd your hart to flint.

Sonnet lady である Dalia は、鏡の中に映っている己れの美しさに見とれているばかりで、詩人の方など見向きもしない。ところが、鏡の中のその美貌と詩人の苦境とのどちらが reality であるかとなると、彼女の鏡の方が実は彼女の虚像を映し、詩人の苦境の方が彼女の実像を映しているというのである。そして、彼女の鏡は詩人にとっては敵なのであり、かの *Narcissus* が己れの姿に見とれた結果ヒアシンスになってしまったのとは大違いで、彼女は己れの美貌に見とれた結果、flint に変わったのだ、と詩人は結んでいる。

詩人が unrequited love (報われぬ恋) の故に苦しみ、やつれ、sleep, night, death, oblivion 等によってその苦しみを逃れようとするというのも、やはり、Petrarch に由来する theme である。

Sonnet 45.

Care-charmer sleepe, sonne of the Sable night,
Brother to death, in silent darknes borne:
Relieue my languish, and restore the light,
With darke forgetting of my cares returne.

And let the day be time enough to morne,
The shipwack of my ill-aduentred youth:
Let waking eyes suffice to wayle theyr scorne,
Without the torment of the nights vntruth.

Cease dreames, th'ymagery of our day desires,
To modell forth the passions of the morrow:
Neuer let rysing Sunne approue you lyers,
To adde more grieffe to aggrauat my sorrow.

Still let me sleepe, imbracing clowdes in vaine;

And neuer wake, to feele the dayes disdayne.

Delia の disdain に苦しみ、不眠状態が続いて、やつれる一方の詩人は、己れの care を charm して forget させてくれる、sleep もしくは death にあこがれる。冒頭の有名な “Care-charmer sleepe” という言葉は、Desportes の “chasse-soin” という言葉を Daniel 自身が翻訳した訳語ということである。1 行目の night と 14 行目の day とは明らかに contrast をなし、単に夜と昼という意味のみならず、夢と現実、更には、昼の太陽である Delia と、彼女の愛を夢みて朝日を待ちこがれる夜という詩人自身をも意味しており、その contrast は幾重にも重なっているのである。そして、このように現実の苦しみから逃れようとする厭世観も、Petrarch に由来していると考えられないこともない。Petrarch は、世俗の闘争から逃れて、魂の平静、即ち、*tranquillitas animae* を得るには、理性や徳とキリスト教の神の両方に依らねばならないと考えたということである。⁵

Delia の disdain に満ちた眼差しによって、詩人の heart が丁度、狩猟の際の獲物のように殺されるという heart conceit は、Shakespeare の *Sonnets* にもよく見られるものであるが、これは Petrarch 等に於ては、眼と心臓との debate という形で現われているものである。

Sonnet 26.

Whilst by her eyes pursu'd, my poore hart flew it,
Into the sacred bosome of my deerest:
She there in that sweete sanctuary slew it,
Where it presum'd his safetie to be neerest.

My priuiledge of faith could not protect it,
That was with blood and three yeeres witnes signed:
In all which time she neuer could suspect it,
For well she sawe my loue, and how I pined.

And yet no comfort would her brow reueale mee,
No lightning looke, which falling hopes erecteth:
What bootes to lawes of succour to appeale mee?
Ladies and tyrants, neuer lawes respecteth.

Them there I dye, where hop'd I to haue liuen;
And by that hand, which better might haue giuen.

Delia の冷たい眼差しに会った詩人の heart は、彼女の favour にすがろうとして、彼女の heart に訴えてみる。ところが彼の期待は裏切られてしまい、彼の heart は、彼にとって安全なはずであった彼女の heart の中で殺されてしまうのである。彼は、3年もの苦しみに耐えてきたのだから、彼女に privilege を期待しても良いはずだと思っていたのに、当てがはずれる訳である。「女と暴君は、掟など守らないもの」なのだから、彼女に期待した自分の方が愚かだったというのである。

さて、自分の恋の苦しみの程度を、神話上の神々が耐えた苦しみと比較することによって、より real に示そうとしたのも、Petrarch であった。

Sonnet 38.

Faire and louely maide, looke from the shore,
See thy *Leander* striuing in these waues:
Poore soule fore-spent, whose force can doe no more,
Now send fourth hopes, for now calme pittie saues.
And wafte him to thee with those louely eyes,
A happy conuoy to a holy lande:
Now shew thy powre, and where thy vertue lyes,
To saue thine owne, stretch out the fayrest hand.
Stretch out the fairest hand a pledge of peace,
That hand that dartes so right, and neuer misses:
Ile not reuenge olde wrongs, my wrath shall cease;
For that which gaue me woundes, Ile give it kisses,
Once let the Ocean of my cares finde shore,
That thou be pleas'd, and I may sigh no more.

この sonnet の中で、Delia はかの Hero にそして詩人 Daniel は Leander にたとえられている。Delia が詩人に対して与える favour, love は、かの Hero が Leander のために岸で明るく燃やした、たいまつ（提灯）の光なのである。その光がないために溺れそうになっている時の Leander のように、詩人も又、Delia の愛なくして、死

にも似た苦しみを味わっているという訳である。そして、お定まりのごとく、詩人の恋に苦しむ心は嵐の Ocean に、Delia の優しい輝く眼差しは救助船に、そして Delia は holy land (地理上の発見の時代を反映した image である) にたとえられている。

更に今度は、イカルスの神話を用いている例を見てみよう。

Sonnet 27.

The starre of my mishappe impos'd this payning,
To spend the Aprill of my yeers in wayling,
That neuer found my fortune but in wayning,
With still fresh cares my present woes assayling.

Yet her I blame not, though she might haue blest mee,
But my desires wings so high aspiring:
Now melted with the sunne that hath possest mee,
Downe doe I fall from off my high desiring;

And in my fall doe cry for mercy speedy,
No pittying eye lookes backe vppon my mourning:
No helpe I find when now most fauour neede I,
Th'Ocean of my teares must drowne me burning,

And this my death shall christen her anew,

And giue the cruell Faire her tittle dew.

詩人の熱い思いは翼をつけて空高く舞上るのであるが、Delia の冷淡な視線に会うと、丁度かのイカルスが、太陽光線の熱によって翼のロウを溶かされて落下してしまうように、絶望の淵へ落とされるのである。皮肉なことに、太陽は熱によってロウを溶かしたのに反して、詩人の太陽たる Delia は、*disdain* という冷たさによって詩人の心を melt 即ち意気消沈させたのである。そくて詩人は、恋に燃えながらも、悲しみの余り、涙の Ocean で溺れそうになるのであるが、このように、火と水の image の contrast によって恋心の表裏を描くのも、convention なのである。

次に、第2の種類例を見てみよう。Delia の beauty を賛美することに終始して

いるような sonnet は、この sequence には非常に少ない。

Sonnet 18.

Restore thy tresses to the golden Ore,
Yeeloue *Cithereas* sonne those Arkes of loue;
Bequeath the heauens the starres that I adore,
And to th'Orient do thy Pearles remoue.
Yeelde thy hands pride vnto th'yuory whight,
T'*Arabian* odors giue thy breathing sweete:
Restore thy blush vnto *Aurora bright*,
To *Thetis* giue the honour of thy feete.
Let *Venus* haue thy graces, her resign'd,
And thy sweete voyce giue backe vnto the Spheares:
But yet restore thy fearce and cruell minde,
To *Hyrca*n Tygers, and to ruthles Beares.
Yeelde to the Marble thy hard hart againe;
So shalt thou cease to plague, and I to paine.

この詩は、amplification の手法によって女性の beauty を列挙していくという点で、Spenser の *Epithalamion* の 170 行前後の部分と似ているのであるが、Spenser の場合が beauty の賛美に終始しているのとは異なり、Daniel の場合は、最後の 4 行に Delia の冷淡さを加えて、詩人に対して優しくしてくれるようにと Delia に願っている。このように、sonnet lady の美しい髪や眼、唇、歯、その他を何らかの image でたとえて、その美しさを賛えるのは、言うまでもなく Petrarchan tradition である。

次に、sonnet lady の beauty を賛美するだけでなく、その beauty のはかなさ、Time の残酷さ等を説き、青春を楽しむようにと勧める sonnet の例を見てみよう。Sonnet 43 に於て、Delia は（陳腐な image ではあるが）花にたとえられ、青春は春という季節に、そして老年は冬にたとえられている。

Sonnet 43.

I must not griue my Loue, whose eyes would reede,

Daniel, *Delia* — Petrarchan tradition の観点から

Lines of delight, whereon her youth might smile:
Flowers haue a tyme before they come to seede,
And she is young and now must sport the while.

Ah sport sweet Mayde in season of these yeeres,
And learne to gather flowers before they wither:
And where the sweetest blossoms first appears,
Let loue and youth conduct thy pleasures thither.

Lighten forth smyles to cleere the clowded ayre,
And calme the tempest which my sighes doe rayse:
Pittie and smyles doe best become the fayre,
Pittie and smyles shall yeeld thee lasting prayse.

I hope to say when all my griefes are gone,
Happy the hart that sigh'd for such a one.

次に, sonnet 31を見てみよう。

Sonnet 31.

Looke *Delia* how wee steeme the half-blowne Rose,
The image of thy blush and Summers honor:
Whilst in her tender greene she doth inclose
That pure sweete beautie, Time bestowes vppon her.

No sooner spreades her glorie in the ayre,
But straight her full-blowne pride is in declyning;
She then is scorn'd that late adorn'd the fayre:
So clowdes thy beautie, after fayrest shining.

No Aprill can reuiue thy withred flowers,
Whose blooming grace adornes thy glorie now:
Swift speedy Time, feathred with flying howers,
Dissolutes the beautie of the fairest brow.

O let not then such riches waste in vaine;
But loue whilst that thou maist be lou'd againe.

乙女である Delia は, “half-blowne Rose” にたとえられている。このはかない命を持つ花が満開になる時には、既に “declining” が始まっているのである。Time は実に残酷にも、己れが与えた美を、次には自らの手で滅してしまうのである。そこで詩人は、その折角の beauty が色あせないうちに、自分を愛してくれるようにと、Delia に哀願する。ここには、Shakespeare の *Sonnets* に於ける Time のような real で dramatic な面は見られない。女性をバラの花にたとえてその美しさを賛え、青春を楽しむようにと勧める点は、やはり Petrarch によっていると言えよう。

最後に、第3の種類のを調べてみよう。

Sonnet 35.

Thou canst not dye whilst any zeale abounde
In feeling harts, that can conceiue these lines:
Though thou a *Laura* hast no *Petrarch* founde,
In base attire, yet cleerely Beautie shines.

And I, though borne in a colder clime,
Doe feele mine inward heate as great, I knowe it:
He neuer had more faith, although more rime,
I loue as well, though he could better shew it.

But I may ad one feather to thy fame,
To helpe her flight throughout the fairest Ile:
And if my penne could more enlarge thy name,
Then shouldst thou liue in an immortall stile.

But though that *Laura* better limned bee,
Suffice, thou shalt be lou'd as well as shee.

自分の詩の不滅性を詠い上げるというのも、Petrarch 独特のテーマであった。そして、このソネットの中で Daniel は、この Petrarch とその永遠の恋人 Laura にはっきりと言及し、自ら Petrarchist であることを示しているのである。この効果的な image によって Daniel は、たとえこの sonnet sequence の出来ばえが Petrarch の *Canzoniere* よりも劣っているとしても、自分の Delia に対する愛情は、Petrarch の

Laura に対するそれよりもはるかに深いものであると断言しているのである。

このように、己れの詩の不滅性をテーマにしたソネットは、*Delia* には比較的多く、Sonnet 30, 34, 36, 37, 48, 50 等がある。その中でもう一例を見てみよう。

Sonnet 48.

None other fame myne vnambitious Muse,
Affected euer but t'eternize thee:

All other honours doe my hopes refuse,
Which meaner priz'd and momentarie bee.

For God forbid I should my papers blot,
With mercynary lines, with seuile pen:
Praising vertues in them that haue them not,
Basely attending on the hopes of men.

No no my verse respects nor Thames nor Theaters,
Nor seekes it to be knowne vnto the Great:
But *Auon* rich in fame, though poore in waters,
Shall haue my song, where *Delia* hath her seate.

Auon shall be my Thames, and she be my Song;

Ile sound her name the Ryuer all along.

Daniel の “vnambitious Muse” は、*Delia* をこの sequence の中で “eternize” することしか求めてはいない。それ以外の “mean” で “momentarie” な名誉などは欲しくないのである。そして、英国の中心であるテムズ川流域一帯に於て名声が高まることなど、彼にとってはどうでも良いのであり、ただ、*Avon* 川流域に住んでいる *Delia* 即ち Countess of Pembroke がこの詩集を読んで下さって、彼に favour を与えて下さることだけがその望みなのだ、ということを言明している。かくて、その自負の通り Daniel は、Petrarch 程ではないにしても、sonnet 作者としての名誉を今日まで持ち続けている訳である。

IV

このように Daniel は *Delia* なる sonnet sequence に於て、その sonnet lady であ

る Delia, 即ち Countess of Pembroke に対する愛 (patron に対する敬愛) を詠う際に、己れの愛の苦しみ, cares, woes, sighs, tears, despair, death, languish 等の心理状態等を、いわゆる Petrarchan conceits を用いて切々と詠い上げ、Delia の beauty, grace, vertue 等を Petrarchan conceits によって賛えながらも、Time の残酷さや青春のはかなさを説き、Delia に対して、青春を楽しむようにと勧め、更には、かくも美しい Delia を詠ったこの sequence が、彼女の美しさと彼の愛の深さ故に、(Petrarch のそれに劣らず) 不滅のものとなるはずだ、という確信を堂々と詠っている点、実に、Petrarchan tradition に従っていると言うことができよう。

この小論は日本英文学会北海道支部第 21 回大会 (於 北海道教育大学札幌分校) に於て発表したものに加筆修正を施したものである。

NOTES

1. テキストは Samuel Daniel : *Poems and A Defence of Ryme*. Ed. by Arthur Colby Sprague. Phoenix Books. (London : The Univ. of Chicago Press, 1965) である。
2. Sprague, *op. cit.*, "Introduction."
3. *Ibid.* 本稿で言う Petrarchan tradition は、Sprague や、L. C. John その他により一般に指摘されているように、Petrarch が彼のソネットその他(ソネットだけとは限らない)に於て unrequited love theme を詠う際の mood や conceits 等の特質にかかわるものである。
4. R. Tuve : *Elizabethan and Metaphysical Imagery* (London : The Univ. of Chicago Press, 1947), p. 420.
5. Cf. 速水敬二著『ルネッサンス期の哲学』(筑摩書房, 昭和 45 年), pp. 38-39.